忘れられた島 ●●下

ニアス島地震から1年

材木入手 困難極め

復興住宅、完成まだ300戸

目標1万3000戸

津波被害が主だったインドネシア・アチェ州では、復興住宅の素材にれんがを使っているケースも多いが、地震被害が中心で多くの人がコンクリートの下敷きになったニアス島では、復興家屋の大半が木造だ。復興再建庁の建設目標は1万3000戸。ところが、材木の入手が困難を極め、3月20日現在、300戸余り（同庁調べ）しか完成していない。

というのも、島の森林の大半は伐採禁止区域。違法伐採とみられる材木も使われているが、政府目標のうち約4000棟の建設を担う国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は合法木材の調達に苦心した。

昨年9月に北米の材木を輸入する方針を発表した後、単価や運搬時間などの問題から取りやめ、国内材を買うことにして2社と契約した。しかし、契約では1月に木材が納入されるはずだったが期日が守られず、別の2社と追加契約して、今月ようやく木材の本格供給が始まったという。

伐採や運搬に伴う許可手続きが複雑多岐にわたることも木材供給を遅らせている。同メダン事務所のグレッグ・ギャラス所長は「許可手続きに時間と労力がかかり過ぎ、一般のNGO（非政府組織）が独力で木材を入手することは極めて難しい。（手続きの簡素・迅速化のため）再建庁が木材供給にもっと関与すべきだ」と指摘する。

資材が島に着いてから建設現場へ運ぶのも大変だ。損壊した約160の橋の大半が復旧していないし、道路も狭く、舗装が傷んででこぼこだ。

島の南東部の三つの小漁村で約250棟の住宅再建を手がける日本のNGO「AMDA」は、船から砂浜に鉄板を渡して重機を乗降させる上陸用舟艇で漁村に木材やセメントを荷揚げしている。

遠浅でそれが使えない別の漁村では、資材を小舟に積んで砂浜の約100㍍沖に停泊し、そこから人が海水に腰までつかりながら浜まで運ぶ。搬送を統括する宇佐美直人さん(46)は「資材搬送は非常に難しく、あの手この手を試しながら取り組んでいる」と話した。

AMDAは20日現在、3村で約50棟を着工済みで、今年中に約250棟を完成させる。これらの漁村では地震後、他の複数のNGOも住宅再建の調査に来たが、資材搬送の難しさから事業化に至らず、AMDAに対しても住民は半信半疑だった。しかし、昨年末ごろから資材が徐々に搬入され始めると、5、6㌔離れたテント村に避難していた被災者も村に戻り、意欲的に建設を手伝っているという。

【ニアス島で岩崎日出雄】

船が接岸できないため、沖の小舟から浜辺へ建設資材を運ぶAMDAスタッフと住民＝05年12月（AMDA提供）